

## 学生参加による「武庫川学院80年史」の編纂

### — 自校教育・広報ツールとして —

米田浩子<sup>I</sup>・河内鏡太郎<sup>II</sup>

(Key words) 学生参加、広報ツール、人物誌、自校教育

謝辞 横川公子（武庫川女子大学附属総合ミュージアム館長）、古野貢、倉橋みどり

#### 要旨

学校法人武庫川学院が2020年4月、創立80周年記念として発行した『武庫川学院80年史』は、周年史に「実践型自校教育ツール」と「広報ツール」という新たな付加価値を生み出した。学生が周年史編纂に参加する授業を4年間、開講し、学生版周年史を『わたしたちの80年史』として独立編集した。本史は新聞記者経験のある教員（筆者：米田I、河内II）が執筆と編集長を分担し、ニュース価値をもとにテーマ別に編集した。両人は学生版周年史の授業も担当した。本史と学生版は『武庫川学院80年史』として2冊セットで刊行した。また、周年史編纂の過程で多数の関連企画を創発し、創立以来80年の歴史を多面的、立体的に描出した。

#### 考察

##### 1. 一般的な周年史編纂の傾向

大学や学校法人は自治体や企業と同様に、創立50周年や100周年などの節目に沿革史（周年史）を編纂することが多い。公益財団法人野間教育研究所の学校沿革史誌コレクションは8645件にのぼる（2020年3月現在、ホームページより）

周年史編纂は新制大学発足から10年が経過した1950年代から盛んになり、1960年代から1970年代にかけて、全学的な事業として組織

的に取り組まれるようになった。1980年代になると好景気の影響もあり、周年史編纂はピークを迎える。2000年には年50冊以上が刊行された。創立からの歩みを時系列で記述する「通史」、関連史料や年表等の「史資料」、それらを一冊にまとめた一体型など。『東京大学100年史』は通史や資料編に分冊化（10冊）され、1984年から1987年にかけて計10巻刊行されており、総ページは12170ページにのぼる。大学史の代表格といえる（西山伸「大学史編纂を考える」資料1）。

周年史は記録性、網羅性を追求するため、大学の歴史が長くなるほどページ数が増える傾向がある。東京大学100年史ほどでなくとも3000ページ以上の大作は多く、その重量から、形式的な“引き出物”と揶揄されることもあった（寺崎昌男「大学沿革史編纂の効用を考える」資料2）。最近では周年史の派生形として写真集やブックレット、漫画など、気軽に読めるタイプのもも見受けられる。自校教育を授業に取り入れる大学の増加に伴い、教科書を意識したものも増えてきた（瀬戸口龍一「大学史編纂事業の意義と役割を考える」資料3）。

一方、ほとんどの大学は毎年、入試広報を主目的としたキャンパスガイド（大学案内）を発行している。キャンパスガイドは大学の教育・研究はもとより、就職状況、取得できる資

I 武庫川女子大学共通教育部非常勤講師  
武庫川女子大学附属総合ミュージアム嘱託研究員（2020年度）  
武庫川学院広報室長

II 武庫川女子大学共通教育部教授  
武庫川女子大学附属図書館長

格、施設紹介など大学のハード・ソフト両面を網羅している。さらに「今」に主軸を置きながらも、「建学の精神」や大学の歴史に紙面を割くケースもある。これとは別に、人事情報や新学科許認可など大学運営の主たる動きは「学院報」「学院広報」など学内刊行物で周知される。これらは直近の情報を正確に記録し、ステークホルダーと共有する意義がある。

周年史はこうした定期刊行物の積み上げとは次元の異なるものでなければならない。記録性、網羅性は欠かせない要件だが、一方で周年史には、その大学に関わったすべての人の思い出を束ね、心ひとつに未来に向かう精神的道標としての役割がある。そのためには常に編纂方法もアップデートする必要があるが、周年事業の一環として前例踏襲され、創立の事情や学部等の設置など学内組織の変遷、研究内容など「よく書かれる事項」と、教育や入試、卒業後の進路、地域社会との関係、経理関係など「あまり書かれない事項」、大学紛争など「書きにくい事項」が偏りがちだ（資料1）。学内の記念誌という位置づけにとどまり、学外へのアピール力が不足していると思われる面もある。

## 2. 学生参加による周年史

武庫川学院は1939年に創立し、35周年のとき、はじめて沿革史を発行した。創立50周年以降は10年ごとに周年史を発行してきた。しかし、周年を重ねるたびにページ数が増し、前述したような周年史特有の弊害がみられたことから、『武庫川学院80年史』編纂にあたり武庫川学院常任理事会で従来の編纂方法を見直した。

一番の変更点は学生の参画である。武庫川学院では70年史まで、全学的な編集委員会のもとで、数人の教職員が周年史編纂の実務に携わってきた。対象となる10年間の年表を詳しく作成し、原稿は各学科や各部署から集め、これを年表と照らして通史及び各部署の部局史として編集する方法が採られてきた。この方法では大学側の事情は詳しく反映されるが、学生の視点を取り入れにくいという反省があった。

そこで大学側、学生側双方の視点で周年史を作り、本史と『わたしたちの80年史』の2冊セットで発行することとした（2015年6月10日 第1回武庫川学院80年史編集委員会）。

『わたしたちの80年史』を作るにあたっては、大学・短大の共通教育科目で2016年度から2019年度まで4年8期にわたり、授業「本を編む」を開講した（図1）。選択科目で1期あたり1単位、8期連続受講で8単位が取得可能。専任教員2人（河内II、古野）、非常勤講師2人（米田I、倉橋）が合同で指導した。



図1 「本を編む」のグループワークの様子(2016年7月)

授業は「1年生から参加し、4年間継続受講することが望ましい」としたが、半期だけ参加する学生も多かった。2年で卒業する短大生、高学年で参加し、周年史の発行を見ずに卒業した学生も多い。4年間で延べ197人の学生が参加したが、8期連続履修した学生は3人、6期連続履修は1人だった。学生の入替わりがある中で、かかわった全学生に一人一本の署名原稿を必ず出稿させ、これを掲載して参加の証とした。

週1回90分の授業は主にグループワークで進行した。イラストの得意な学生は創設者の一代記を漫画で描いたり、キャラクターを考えたりした。デザインの心得がある学生はレイアウトや表紙のデザインを担当した。文章に自信のある学生は、インタビューや座談会の様子を原稿にまとめた。前書きと編集後記も学生が書いた。

た。

授業では学内外から多くのゲスト講師を招いた。そこで取り入れたのが「記者会見方式」だ。メディアの記者会見のように、ゲストに対し、学生が記者になって質問をする（図2）。インタビューも数多く行った。グループ別に名誉教授や教職員にインタビューを申し入れ、インタビュアー、撮影、原稿執筆を分担した。



図2 一期生がゲスト講師を務めた「記者会見方式」の授業の様子（2016年5月）

関心を持ったことは進んで取材し、原稿にすることを推奨した。過去の教員について詳しく調べた学生、書道ゼミのルーツに注目して、学内に残る様々な書をたどった学生、教職員が利用する地域の食堂に取材に訪れた学生もいた。原稿は教員が繰り返し添削し、記事としての完成度を高めた。コンテンツの見せ方については、講師陣に加わった外部の編集者（倉橋）が雑誌編集の経験を生かし、「写真で見せるページ」「カラーページ」「しっかり読んでもらうページ」などと分類し、割り付けた。スマートフォンで撮影したキャンパスの「映える写真」をInstagram風に並べたり、LINEのアンケート機能を使って学生の声を集約したり。現代の学生生活がリアルに伝わるのは学生参加の目に見える効果であった。

### 3. 広報ツールとしての周年史

本史も編集方針を変更した。各部署からの寄稿を廃し、全編を執筆担当が書き下ろすこと

とした。寄稿のメリットは、それぞれの部署が持つ詳しい資料に基づく正確な記述が期待できること、執筆担当に過度の負担がかからないことだが、10年の間に異動もあり、必ずしも期待どおりの原稿が集まるとは限らない。文章のタッチや内容にばらつきが出るため、リライトに相当の手間がかかり、結果として客観性や読みやすさが阻害されがちだ。

武庫川学院80年史でも全学的な「80年史編集委員会」が組織されたが、実務は編集長（河内）と執筆担当（米田）が担当した。両人は新聞記者経験があり、学院の80年を「取材」対象として客観的に見ることに徹した。写真撮影も原則として執筆担当が行った。

各部署の専門的な視点を参照するため、2016年6月と2018年1月に全学部学科、研究科等、事務局各部署に対してアンケートを配布し（図3）、「この10年の重大トピックス」を5項目程度、箇条書きで挙げてもらった。どのトピックを中心に描くかは、ニュース性を基準に判断した。70周年から80周年にかけての最大のニュースは4学部から10学部への飛躍である。そして全国初の駅高架下の新キャンパス開設、東京オリンピックを前に再認識される「スポーツの武庫女」の伝統。80周年に合わせて始動した広報戦略「MUKOJO ACTION」、令和元年初日に公表した100周年に向けた「MUKOJO Vision」は学院として最もアピールしたい部分だ。こうした中から、新聞の「一面トップ」「二面」「社会面トップ」等をイメージして原稿の割り振りを決めた。

具体的にはニュース性の高い順に

- 1、MUKOJO Vision公表
- 2、創立80周年記念式典
- 3、10学部への飛躍
- 4、翌年に迫った東京オリンピック

などと位置づけた。多岐にわたる10年の変化は「キャンパスの進化」「キーワードは連携」「附属中高の改革」など、特筆すべき成果とア

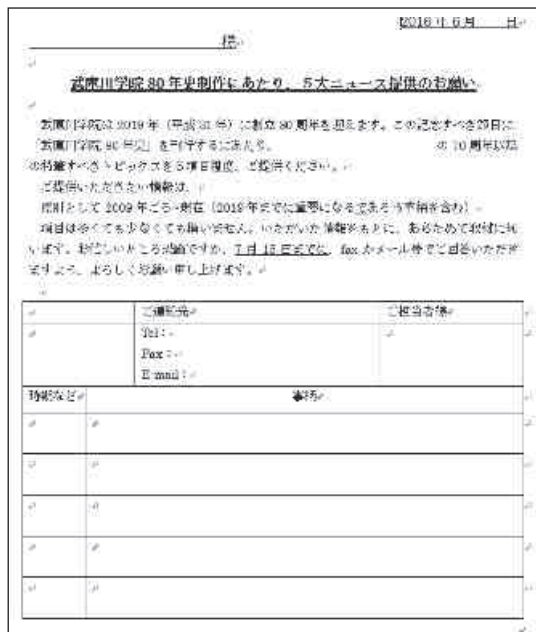


図3 各部署に70周年以降の重大トピックス提供を求めた依頼書（2016年6月）

ピールしたい事柄をもとに、テーマ別にまとめた。網羅しきれない部分は部署ごとに寄せられた「重大ニュース」をもとに補強取材をして記録上の漏れを防いだ。さらに、魅力ある“話題もの”は、「飲食自由な図書館」や「看護学部一期生が国家試験に全員合格」など、囲み記事風に挿入した。最新のニュースを反映するために入稿ギリギリまで取材、執筆を続け、組み替えた。

一方、80年史編纂では創立以来の歴史を主に写真で辿る特集を組んだ。学院に残る写真の大半が未整理だったため、紙焼き写真のデジタル化を並行して行った。卒業生からも写真提供の協力を得て、デジタル保存を進めた。

2020年4月に附属総合ミュージアムが開館し、史資料を集約、研究する体制ができたが、それ以前は学院資料は周年史編纂のたびに集約されるのみで、組織的な体制がなかった。80年史編纂までに約1万件の写真デジタル保存し、80年史発行後は附属総合ミュージアムで引き継ぎ、データベース化を進めている。

#### 4. 人物誌としての周年史

歴史は人が作る。人が登場しない歴史はない。武庫川学院の80年は19万人の卒業生と多くの教職員、地域の人、関係者によって築き上げられた歴史である。80周年は創立時に入学した1期生が93歳となり、草創期を知る世代に話を聞ける事実上、最後のチャンスと考えられる。このため、高齢の卒業生から順に聞き取りを行い、その多くを原稿に反映した。周年史で索引が付される例は少ないが（資料1）、本史巻末に用語索引と別に、人名による索引をつけたことは特筆に値する。

巻末の人物索引に挙げた名前だけで300人を超える。いわば武庫川学院にまつわる「人物誌」である。現役の学生のはつらつとした声もあれば、5歳の幼稚園児の声もある。「立学の精神」を体現し、今なお、社会とつながり、活躍する一期生の声、甲子園キャンパスの前身である甲子園ホテルの味を再現した地域のケーキ店の店主の声がある。行間から息遣いや体温が立ち上る。そしてその言葉を発した人の周辺に、思いを共有する幾人もの人がある。一人に出会えば、次々出会う。年史編纂は人物発掘の好機である。

#### 5. 内部質保証と周年史

2011年、「大学史の編纂」や「大学文書の保存と活用」が、大学評価の内部質保証の一項目として評価されるようになった（武田秀司「大学史編纂の現代史的な意義」資料4）。自校教育の取り組みについても、3つの認証評価機関が「大学の目的周知」「自学理解」の有効な方途として認識し、積極的に評価している（大川一毅「大学における自校教育の導入実施と大学評価への活用に関する研究」資料5）。

岩手大学の「大川一毅准教授は、自校教育を「自校に関わる特性や現状、課題等を中心的な教育題材として実施する一連の教育・学習活動」とであると定義する。1990年代後半から本格化し（資料4）、2008年時点で国公私立752校のうち、自校教育を実施しているのは136校。

さらに33校が検討中だった（資料5）。周年史を自校教育の教科書にしている例はあるが（資料3）、周年史編纂に学生が参加する実践的な自校教育は見当たらない。

筆者（米田）は、武庫川女子大学で80年史発行後、「女性史」と「自校史」をミックスした共通教育科目「メディアに映る女性」（担当：米田）を立ち上げた。この授業の中で、一部「武庫川学院80年史」を題材に、自校教育を取り入れた（2020年度、2021年度）。コロナ禍の影響でオンデマンドでの授業となったが、戦中戦後に学生時代を送った卒業生にあらためてインタビューを行い、その音声や写真を授業で紹介したり、卒業生から寄せられた原稿をもとにレポートを書かせたりした。学生からは「武庫川女子大学にかつて夜間課程があったことを初めて知った」「学ぶことが当たり前でなかった時代を知り、今ある環境を大切にしようと思った」「校祖公江喜市郎先生の考え方を知って、この大学の学生であることに誇りを持った」などの声が寄せられている。これもまた、「学生による自校史」である。

## 6. 関連企画の効果

武庫川学院80年史は編纂の課程で多くの関連企画を創発した。「武庫川高等女学校一期生」や「武庫川女子専門学校卒業生」、「短大二部に進学した沖縄出身者」「オリンピック」など、テーマ別に卒業生を招き、学院長、学長との座談会を計5回開催した（図4）。80周年記念事業として3年間、FM大阪で放送（2017年4月～2020年3月）した「武庫川女子大学ラジオ-MUKOJOラジオ」と連携し、多数の卒業生をゲストに推挙した。卒業生のトークは「読むMUKOJOラジオ」「続読むMUKOJOラジオ」の2冊の冊子となった（図5）。魅力ある歴史と人材の掘り起こしは、2019年11月10日に開催した80周年記念式典を彩る素材となり、多数の卒業生、在学生が式典、祝賀会の出演、演出に加わった（図6、図7）。



図4 座談会「短大二部・沖縄編」で大河原量学院長（前列左）を囲む卒業生ら（2017年11月）。



図5 創立80周年記念事業の一環で2017年4月から3年間、FM大阪で放送した「武庫川女子大学ラジオ-MUKOJOラジオ-」から生まれた2冊の冊子。

Webとの連動も特筆すべき取り組みだ。編纂の過程で完成した原稿を順次、ホームページ「取材中！武庫川学院80年史」としてアップした（図8）。取材の進捗具合を知らせ、周年史の完成を待つ期待を高めるためだ。本史だけでなく、学生の手原稿もまとまった段階でホームページにアップした。2018年2月発行の「鳴松会報」（同窓会誌）では、年史に掲載予定の「学寮物語」をダイジェストで掲載し、19万人の卒業生に届けた。



▲図6、▼図7 武庫川学院創立80周年記念式典のパンフレット。出演、演出、アトラクション等に参加した多くの卒業生、在学生の名前がある。



図8 80年史編纂過程からホームページに『武庫川学院80年史』の記事を先出した。



図9 学生の作った『わたしたちの80年史』と2冊セットで発行した『武庫川学院80年史』。化粧箱の題字は一期生の吉野喜美子さんが揮毫した。



図10 卒業生文集

卒業生からも多大な協力を得た。『武庫川学院80年史』の題字は、一期生の書家 吉野喜美子さんの揮毫である（図9）。「周年史に生かせたら」と、自ら思い出を原稿にまとめた卒業生も多く、32人の原稿を掲載した「卒業生文集」（80年史編集委員会編）を「武庫川学院80年史特別編」として300部発行した（図10）。『武庫川学院80年史』の資料部分を充実させた「資

料編」、座談会や式典のダイジェストを収録した記念DVDも発行した。

『武庫川学院80年史』は学院に関係する様々な人の心を刺激し、結果的に現役の学生、学院、卒業生の共同制作となった。

## 7. 精神的道標としての周年史

先にも述べたが、周年史には過去を踏み固めて歴史に関わったすべての人の思い出を束ねるとともに、学生を含めたゆかりの人たちが心ひとつに未来に向かう、精神的道標の役割がある。そのためには、読まれる周年史であること、生きた周年史であることが重要だ。

記録としての信ぴょう性は当然、求められる。たとえば、校祖・公江喜市郎が学院創設前に校長として赴任した尼崎中学校（現兵庫県立尼崎高校）について、国立公文書館や官報で発令の日付を確認するのが歴史研究の手法だ。校長着任が6月となっているのは、前任者が依願退職したためであることが、書類から読み取れる。これも重要なエビデンスだ。こうした過去の事実については、70年史までにほぼ、確認がなされているとの前提に立ち、我々はあえて現在の県立尼崎高校に足を運び、取材をした。そこには、公江校長在任中の建物の模型や、当時のまま残る正門、応接室に掲げられた若き日の公江喜市郎の写真などがあった。これもまた、揺るがぬ事実であり、発見である。

武庫川学院80年史は「歴史書」であると同時に「読み物」である。どのページにも懐かしい、あるいは珍しい写真やエピソードが現れる。ワクワクしながら読み進み、ページを繰る手が止まらなくなる年史を意識した。

拓殖大学創立100年史編纂室 編集委員 武田秀司は大学史が「建学の精神の発揚」になり、本来の意味での「public relation」の活動になると指摘する。「まとめ上げた自校史自体が、その大学の實力、持っているパワー、エネルギーを示す」とし、「きちんとした自校史の編纂ができない大学は、生き延びるパワーを欠き、大学ブランドを構築できないと言えないだろうか」と問いかけている（資料4）。

東京大学名誉教授の寺崎昌男は「沿革史の編纂と刊行は各大学が自らのアイデンティティーを確認する作業である。そしてその沿革史を刊行することは、確認されたアイデンティティーを大学の全構成員が共有することに連な

る」と、指摘する（私論公論「大学沿革史-その刊行にはどんな意味があるのか」資料6）。

つまり、周年史は時代とともに進化してしかるべきものであり、周年史編纂にどれだけの新規性を込められるかは、大学の先見性を測るバロメーターになる。

発行後、多くの反響が寄せられた。耳目を集めたのはやはり『わたしたちの80年史』だ。神戸新聞や読売新聞で紹介されたのを機に、「ぜひ読みたい」「高校の授業で生徒に取り組みせたい」など、問い合わせが相次いだ。一方、本史は、大学史の専門家から「新たなテーマ別大学誌のモデルとなる」と高い評価を得た。カラフルで楽しい学生版を手にとった後、「どれどれ」と本史のページをめくり、引きこまれて読みふけてしまったという話も聞く。発行後、日がたつにつれ、2冊両方にまんべんなく称賛の声が届くようになり、「学生による分冊が本編と対をなして学院の歴史と魅力を立体的に伝えている」（Between 2021年3、4月号 資料7）、「あらゆる部分で独創的な学院史」（2020年10月3日 全私学新聞 資料8）と高い評価を得た。何より本史が単体として存在せず、学生版とセットである意義が称賛されたことは、関わった者として最大の喜びである。

## 8. 展望と課題

武庫川学院80年史発行と相前後して、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい始めた。コロナ禍で登学が制限され、大学への帰属意識が持てずにいる学生が多い中で、学生による周年史編纂は新たな自校教育のモデルを示せるのではないか。周年史編纂に学生が参加することは、実践型の自校教育になる。参加した学生は母校のことを知り、母校への愛着を深めて、「この大学で学ぶ意義」を再認識する。編纂に参加しなかった他の学生にとっても、同世代の目で描かれた学院史は、格式ばった周年史よりも身近に感じられるはずだ。

周年史は、周年事業実施期間の2、3年前から編纂が始まるケースが多く、その期間以外

の学生の声反映されにくい。毎年、学生に年史掲載を意識して原稿を書かせ、それを積み上げて周年史に生かせば、周年期間に関わりなく、全世代の学生の声を反映することができるだろう。

一方、学生の手になる周年史は、期せずして本学特有の学生気質を表すことになった。「素直さ」「まじめさ」という従来、本学について語られるイメージと大きく違わず、概ね高評価である。ただ、こうして生み出されるイメージが、大学や学校法人がめざすブランドイメージと合致するとは限らない。学生が周年史編纂に関わることは、大学や学校法人の等身大のありようを、さらけ出すことになる。それが外部にどう受け止められるかはコントロール外であることを、あらかじめ覚悟する必要があるだろう。

- 月：地域科学研究会高等教育情報センター  
7) Between 2021年3,4月号  
8) 全私学新聞 2020年10月3日

#### 参考文献

- 1) 西山伸「大学史編纂を考える—歴史・現状・今後—」早稲田大学史紀要、2017年2月：早稲田大学大学史資料センター P330,332,336～338,343～349
- 2) 寺崎昌男「大学沿革史編纂の効用を考える—特色の確認、アイデンティティの醸成、そして自校教育—」名古屋大学大学文書資料室紀要 2015年3月：名古屋大学大学文書資料室 P100
- 3) 瀬戸口龍一「大学史編纂事業の意義と役割を考える」名古屋大学大学文書資料室紀要 2015年3月：名古屋大学大学文書資料室 P119,P123～126
- 4) 武田秀司「大学史編纂の現代史的な意義」高等教育問題研究会FMICS、2016年6月：P2,P5,P23
- 5) 大川一毅「大学における自校教育の導入実施と大学評価への活用に関する研究」平成20～22年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究成果報告書 2011年3月：岩手大学 P7,P66～68
- 6) 寺崎昌男 私論公論「大学沿革史—その刊行にはどんな意味があるのか」2020年8



「武庫川学院80年史」と「わたしたちの80年史」の進行		
日 時	武庫川学院80年史 (A)	わたしたちの80年史 (B)
2015年6月10日	本史としてのAと、学生主体で作成するBの2分冊とすることを決定	
2015年12月16日	2016年度から共通教育科目で「本を編む」を4年間、開講する方針を決定	
2016年2月	鳴松会報(同窓会報)で卒業生に情報提供の呼びかけ	
2016年度	5月18日 座談会「われら、一期生」開催 6月 各部署にこの10年の5大ニュース提供を呼びかけ 10月3日 座談会「女専時代」開催 2017年1月 ホームページに特設サイト(「取材中!武庫川学院80年史」)を開設 ・題字を一期生の書家吉野喜美子さんに依頼	4月18日 共通教育「本を編む」開講(共同担当 4名) 前期:履修者45名 ◇ゲストに記者会見方式で質問 ゲスト:武庫川高等女学校一期生 高殿円(作家)ほか 後期:履修者31名 ◇座談会「女専時代」取材 ◇アンケートコーナー作成
2017年度	4月 FM大阪で80周年記念「武庫川女子大学ラジオ-MUKOJOラジオ-」(毎週水曜午後8時~8時30分)がスタート。 80年史と連動し、卒業生をゲストに選出。3年間約160回の放送で約200人が出演 4月 吉野喜美子さんより題字納品 5月~ 「学寮物語」取材 廃寮になった寮を中心に、元寮生から聞き取り 10月28日 座談会「安心・安全を守る」開催 11月20日 座談会「短大二部・沖繩編」開催 2018年1月 事務局各部署に5大ニュース提供を依頼 2月 鳴松会報に特集「懐かしの学寮」掲載	2017年度前期:履修者26名 5月 ゲスト:総務部長 :図書課長 ◇「武庫女見守り隊」取材 7月 ゲスト:施設部長 7月 ホームページ特設サイトに「「本を編む」履修生も取材中!」を開設 学生原稿10本を掲載 後期:履修者17名 ◇「名誉教授に会ってきました」取材 ◇写真で見せるコーナー作成 座談会「短大二部・沖繩編」取材
2018年度	5月 一次原稿入稿 7月~ 旧学院資料室写真資料をデジタル化 7月~ 一次原稿確認依頼 10月 東日本大震災被災地(岩手県大槌町)植樹取材 11月17日 座談会「オリンピックたち」開催 広報戦略「MUKOJO ACTION」始動 ・各節の扉に付ける語録の選定 ・年表作成 ・トップインタビューおよび「100年に向かって」取材	2018年度前期:履修者17名 ◇スゴク風年表作成 7月 ゲスト:前男女共同参画推進課長 後期:履修者7名 ◇「むこ映エショット」などカラーコーナー作成 ◇ゲスト:武部健也(大和出版印刷社長) 2018年12月 MUKOJOラジオに開講時から継続履修している3人がゲスト出演 ・2020年度版のキャンパスガイドで「本を編む」を巻頭特集。履修生4人と卒業生2人が思いを語る
2019年度	5月1日 MUKOJO Vision発表 デジタル化した写真から「あの日、あの時~蘇った写真から」を作成 各部署からグラフ、表の素材収集 2次原稿入稿 7月 2次原稿確認 校閲開始 8月 ドローンで中央キャンパス撮影 9月 ヘリコプターで「空から見たキャンパス」取材 11月10日 武庫川学院80周年記念式典開催 11月 最終原稿入稿 2020年1月~ 最終原稿確認 索引作成 2020年2月 学内各部署に希望部数調査 ISBN取得 3月 校了	2019年度前期:履修者36名 ◇「ムコジョVoice」アイデア出し 4月 ゲスト:辰巳由貴(日本さくらの女王) 5月 校閲を学ぶ ゲスト:小国美弥子(読売新聞校閲記者) 2019年度後期:履修者13名 ◇表紙デザイン ◇「はじめに」「おわりに」執筆 12月~ 全履修生に署名原稿確認 2020年1月 入稿
2020年4月	武庫川学院80年史発行 特別編として卒業生文集発行	
2020年12月	武庫川学院80周年記念DVD発行 武庫川学院80年史資料編発行	